

聖書：コリント人への手紙第二 5：11～15

説教題：キリストの愛に駆り立てられて

日時：2024年12月1日（朝拝）

パウロは前回の10節でこう言いました。「私たちはみな、善であれ悪であれ、それぞれ肉体においてした行いに応じて報いを受けるために、キリストのさばきの座の前に現れなければならないのです。」非常に厳粛な言葉でした。最後の日に一人一人その行いが評価されます。それまで隠されていたすべてのことが明るみに引き出されて調べられます。私たちは自分の全人生の報告書を出すことになるのです。そしてそれに応じて報いを受けます。このことを受けてパウロは今日の11節で、「そのため、主を恐れることを知っている私たちは、人々を説得しようとしています」と言います。この恐れはもちろん恐怖の恐れではありません。彼は9節で「私たちが心から願うのは、主に喜ばれることです」と言いました。このあと見ますように、パウロはキリストがいのちさえもささげて愛してくださったことを知っていました。その感謝を彼は表したいと願っています。そういう意味でやがて主にお会いする日を彼は切望しています。しかしその思いは恐れと両立することがこのように言われているのです。かの日はやはり重大な日なのです。そこでパウロは人々を説得することに努めていると言います。まだ福音を信じていない人にはキリストを信じてさばきから逃れるように、やがての日が救いの日となるように、また信仰者にはかの日に主に喜ばれる者であるように、良き報告書を出せる者であるように、と説得することでしょう。

そう述べて彼は「私たちのことは、神の御前に明らかです」と語り、神の前に清い良心をもってこの働きに励んでいることを証しします。なぜこのような言い方をするかと言えば、それはパウロの誠実さを疑う人々がいたからです。パウロを使徒として認めず、否定する人、彼が悪い動機によってこの活動をしていると批判する人たちがいたからです。パウロはこれまでも何度もこの手紙の中で自分は神の前で誠実に歩んで来たことを語って来ました。1章23節：「私は自分のいのちにかけて、神を証人にお呼びして言います。私がまだコリントへ行かないでいるのは、あなたがたへの思いやりからです。」2章17節：「私たちは、多くの人たちのように、神のことばに混ぜ物をして売ったりせず、誠実な者として、また神から遣わされた者として、神の御前でキリストにあって語るのです。」4章2節：「かえって、恥となるような隠し事を捨て、ずる賢い歩みをせず、神のことばを曲げず、真理を明らかにすることで、神の御

前で自分自身をすべての人の良心に推薦しています。」 今日の箇所でもそのように自らについて弁明しています。

しかしただそれだけで話を終えません。「それが、あなたがたの良心にも明らかになることが、私の望みです」と彼は続けます。神の前で自分は清い良心をもって奉仕しているから、あなたがたに分かってもらわなくてもいいんだとは言いません。コリント人たちはコリント教会に入り込んでいた偽使徒たちによってパウロを疑い、パウロから離れるようにという影響下にありました。そんな彼らにパウロは、あなたがたにも私のことが正しく理解されることが私の望みだと言います。その際、彼は「あなたがたの良心にも明らかになることが」と言います。つまり人の声ではなく、自らの良心の声に聞いて、そう確信してほしいとパウロは言っているわけです。それは言い換えれば、私の言葉と生き方をよく見てあなたがたが良心に従って考えるなら、私が神から遣わされた使徒として歩んでいることが分かってもらえるはずだと彼が言っていることになります。

こう述べるのは単なる自己推薦のためではないというのが 12 節です。自分を持ち上げ、自分を高く上げようとしてこのようなことを言っているのではない。むしろ「うわべを誇る人たちに応じられるようにしたい」と言います。この「うわべを誇る人たち」とは特に偽使徒・偽教師たちのことです。彼らは外見や肩書き、推薦状や雄弁な話しぶりといった外面的なこと、外なる人を誇っていました。そしてこの点でパウロを見下し、批判していました。そういう人たちに応じられるようにしたい。すなわち対抗できるようになってほしいということです。彼らの主張に対して「いや、そうではない。パウロは真の使徒である。彼は私たちにとっての誇りである」と言えるようになってもらいたい。もちろんこの「誇り」は人間的な自慢ではなく、神が遣わした使徒として認め、感謝するということです。彼らが自分たちの良心に従ってそのことを確信し、そうしてパウロを攻撃し、否定しようとする偽使徒たちに応じることができる者たちになってもらいたいとパウロは願っています。

3 節の「私たちが正気でないとすれば」という言葉もパウロへの批判の言葉だったのかもしれませんが。このように言われたということは、そのように見える面もあったのでしょう。実際、使徒の働き 26 章 24 節を見ると、パウロが王の前で弁明した時、総督フェストゥスが大声で「パウロよ、おまえは頭がおかしくなっている。博学がお

まえを狂わせている」と言ったと記されています。パウロの熱心さがある人から見ると正気でないと見えることがあったのです。あるいはパウロが多くの苦難を甘んじて受けながら福音宣教に励む姿を見て、ある人はそう言ったのかもしれませんが。このあと6章4節以降でパウロは苦難や苦悩や困難の中で、またむち打ち、入獄、騒乱のただ中で仕えたことが証しされます。さらに11章24節以降では、たとえば26節を見ると「川の難、盗賊の難、同胞から受ける難、異邦人から受ける難、町での難、荒野での難、海上の難、偽兄弟による難」にあったことが述べられます。なぜそこまでの苦難を受けながら福音を語ろうとするのか。それはある人からすれば狂っている、正気でないと見られたのです。しかしパウロはそれは神のためだ！と言います。そしてあなたがたに対しては正気であると言います。パウロは人々の救いと霊的成長のためには冷静さと深い思いやりを持って行動しました。その彼の姿勢は先の第一の手紙14章18～19節の次の言葉にも見られます。「私は、あなたがたのだれよりも多くの異言で語っていることを、神に感謝しています。しかし教会では、異言で一万のことばを語るよりむしろ、ほかの人たちにも教えるために、私の知性で五つのことばを語りたいと思います。」 このようにパウロは神に対しては熱心に、そして人々に対しては彼らの霊的成長に仕えるためにと自らをささげていました。

ここまでを読んで私たちは改めてあのパウロも人々から誤解されたり、中傷されたりする中にあったことを知ります。と同時にそういう中でパウロはどのように行動したのか、大事なことを教えられます。私たちも誰かに誤解されたり、ある人との関係がうまく行かない時があるかと思います。その時、どうしたら良いのでしょうか。パウロから教えられることは人に向かうよりも、まずはすべてをご覧になっている神の前で自らが正しく歩むということです。主を恐れて、神の御前で誠実に責められるところがないように努めて歩む。そのようにする時、そこから出て来る言葉や生活が人々の良心に訴えるものとなる。人々はそれを見て、良心に従い、この人は正しい、この人は誠実である、この人は神の前で信頼できる人であると確信するようになります。そして第三者が様々な批判を展開しても、それは違う！と言って対抗するようにさえなる。私たちもこの道を進みたいと思います。自分を誤解する人や悪く言う人を責めたり、その意見を変えるように要求するよりも、まずは自らが神の御前で、神に対して誠実に歩むこと。そうする時、その生き方はそれを見る人々に訴える力を持つのです。周りの人々は良心に照らして正しい確信を持ち、認めてくれるようになる。さらには色々な状況で自分を支え、援護してくれる側に回ってくれる。この道を私たちも

行く者でありたいと思います。

さて残りの 14～15 節でパウロは自分のこのような歩みの根底にあるものについて語ります。それはキリストの愛であると言います。ここに「キリストの愛が私たちを捕らえている」とあります。そこに印がついていて、欄外を見ると別訳として「駆り立てている」とあります。同じ言葉はたとえばルカの福音書 8 章 45 節で長血の女がイエス様に触れて癒やされた記事において、群衆がイエス様を囲んで押し合っているという状況を指す場合に使われています。この「キリストの愛」という言葉でパウロが考えていたことが、その後に出て来ます。それは「一人の人がすべての人のために死んだ」ということです。この「一人」とは「キリスト」のこと、すべての人の「ために」とは、その「身代わりとして」、そして「死んだ」とは言うまでもなく「十字架上の死」のことです。神であるキリストが人となって、その尊い無限の価値を持つ命をささげてくださいました。その測り知れない犠牲をもって信じる者の罪が赦されるようにしてください、永遠のいのちを持つ者となるようにしてくださいました。そのキリストの愛が私たちを捕らえているとパウロは言います。これは現在時制で語られていますから、絶えず、いつもそうであるということです。途切れることなく自分に迫って来て、自分のある行動へと駆り立てていると。

この先を読む上で少し細かいのですがコメントが必要と思われるのは3回繰り返して出て来る「すべての人」とは誰のことなのかということです。聖書で「すべて」という言葉が使われる場合、必ずしも文字通り「全部」を意味するとは限りません。「多くの人」を指す場合に「すべての人」という表現が使われることも良くあります。そうであるかどうかはその文脈で判断しなければなりません。ここでキリストは「すべての人のために死んだ」と言われていますが、その後「すべての人が死んだ」と言われています。これはキリストの死の効力あるいは効果にあずかったという意味です。ここで重要な問いはキリストの死の効力にあずかりながら復活にあずからない人、つまりキリストの救いにあずからない人はいるのかということです。パウロはローマ人への手紙 6 章 8 節で「私たちがキリストとともに死んだのなら、キリストとともに生きることもなる」と言っています。つまりキリストの死に結ばれた人は必ずキリストの復活にもあずかる。とすると今日の箇所「すべて」はもれなく全員という意味にとるのは難しいことになります。地球上に存在したすべての人、全員が救われるわけではないからです。今日の箇所 15 節後半でも「生きている人々が、もはや自分の

ためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためです」とあり、これは明らかにクリスチャンを指していますが、そこに「自分のために死んでよみがえった方」とあります。ここで、ある人々のために死んだキリストは、それと同じ人々のためによみがえったと言われています。キリストの死が対象とする人と、キリストの復活が対象とする人は同一です。ですからキリストの死にあずかる人はキリストのよみがえりにもあずかる人でなければなりません。片方だけにあずかるということはないのです。パウロは今や救いが異邦人にも広く開かれ、そういう意味でキリストの死は全世界の多くの人々のためのものであることを示すために「すべての人」と語っていますが、実際にこの祝福にあずかるのはクリスチャンであるということになります。

そのことを押さえてここを読みたいと思います。ここにキリストが死んだ出来事において、すべての人が死んだと言われています。ここにキリストの死において二つの死が起こっていることが分かります。一つはキリストの死で、もう一つは私たちの死です。キリストの死によって、この方を信じる私たちは刑罰を免れ、永遠の死を身に招くことがない者とされました。しかしそのことは私という存在が以前と何も変わらず、同じ状態で生きているということではないのです。キリストの死に結ばれた結果、私たちも死んだのです。それは古い自分に死んだということです。それまでの罪に支配された自己中心の自分に死んだ。ですからそこから新しい生き方が始まるのです。それが 15 節です。それは「生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためです」ということです。この生き方へと進むためにキリストは死んでくださったと言われています。私たちはかつては自己中心の生活をしていました。神から離れて自分を神の位置に置き、自分が思う通りに生きようとする生活をして来ました。しかし罪に支配されていた私たちが自分の思うように生きようとするところには真の幸いや満たしはありませんでした。そんな私たちはキリストを信じて、キリストと結ばれ、その十字架の死にも結ばれて、古い自分に死にました。そういう私たちは以前と同じ歩みはしないのです。今や私のために尊いいのちさえも捨てて死んでくださり、復活のいのちを勝ち取ってくださった方のために生きる者へと導かれたのです。キリストに感謝し、キリストに喜ばれるように歩みたいという願いのもとに生きる者へと変えられたのです。それは 13 節で見たように、キリストを遣わしてくださった神に対する熱心という歩みに現れて来ますし、人々の救いと益のために自らを律して仕えるという歩みに現れて来ます。たとえ苦難

がそこに伴っても、キリストの愛に応えたいという思いに強く動かされている者として、その道を行くのである。これが17節で「その人は新しく造られた者です」と言われている人の特徴です。17節：「ですから、だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」今日は詳しくこの言葉を見ることはできませんが、短く触れたいことはクリスチャンが新しく造られたと言われている時の新しさはどこに見られるかということです。私たちは新しく造られたと言われても、そんなに自分は新しい者になっているようには思えないが、・・・と戸惑うかもしれません。しかしその新しさは15節の「もはや自分のためではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きる」という生き方の変化に現れるのです。クリスチャンはキリストの身代わりの死を感謝しますと言いながら、それまでと同じ自己中心の歩みを続ける人ではありません。だれでもキリストの内にあるなら、その人は新しく造られた者です。その人は今やキリストの愛を知り、キリストの愛に押し出されて、もはや自分のためではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きる人です。そういう生き方をする者たちとされているのです。

私たちの召しは様々です。皆がパウロと同じ直接伝道者ではありません。それぞれの置かれた場所、遣わされた場所での、それぞれに与えられている働きや使命があります。しかしその芯にある考えはパウロと同じです。キリストの愛を知る者にキリストの愛は絶えず迫って来るはずで、その迫りを受けて私たちは以前までとは違う生き方をするように導かれています。今日もご自身の愛を持って迫ってくださるキリストに押し出されて私たちもその愛に応える歩みへ進む者でありたいと思います。信仰を持つ以前と同じ自分のための生き方ではなくて、私のために死んでよみがえった方のために生きる者であるように。そこに新しく造られた者とされている恵みを味わいつつ、キリストのお考えがなることのために、その御国の完成のために、与えられた持ち場での役割を果たし、用いていただく歩みをささげる者へと導かれたいと思います。